

〔論文〕

## 女子短大生の子ども観と情動的共感性との関連

The Relationship between the Perception toward Preschool Children  
and the Emotional Empathy of Female College Students

藤 田 文

Fujita Aya

### ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate the relationship between the perception toward preschool children and the emotional empathy of female college students. Female college students responded to a questionnaire asking about the perception toward children and the emotional empathy. The scale of the emotional empathy was consisted of three subscales; emotional-warmth, emotional-coolness, and emotional-susceptibility. The results showed that the empathy-warmth was higher in the students who have the positive image of children than in those who have the negative image of children. And the result about the empathy-coolness indicated the reverse tendency. These results indicated that students' perception of children related with the emotional empathy.

Key words :perception toward children,emotional empathy,preschool children,female college students

### 【問題と目的】

近年、少子化などの社会的状況の影響もあり、青年期の大学生達が日常的に子どもと接する機会が減少しつつある。そのため、子どもを目の前にしても、どのように接してよいのか不安である、どういった言葉をかければよいかわからないという学生も少なからずいる。学生達にとって、自分達と同世代の友人とだけでなく、子ども達のような世代の異なる様々な人々とコミュニケーションがとれることは重要な課題となる。世代間のコミュニケーションによって異なる視点の獲得が可能となり、複雑な社会への適応が促進されると考えられるからである。また、自分が親になる前の学生時代に、子どもとのコミュニケーションの経験をし、コミュニケーションをスムーズに行うためのスキルを身につけておくことは親準備性の観点からも意味があると考えられる。

従来、子どもと大学生の世代間のコミュニケーションについては、教育実習前後の実習生の変化という文脈で検討されてきた。吉良・佐藤・篠原 (1974)、大野木・宮川 (1996)、三木・桜井 (1998) では、教育実習や保育実習に参加した学生は、実習後に、実習不安を低下させ、肯定的子ども観や保育者効力感を向上させることが示され、教育実習という機会に子どもと接することにより、さまざまな肯定的な効果が得られることが明らかにされている。

しかし、これらの研究の場合、幼児・学校教育に興味関心があり、教師の職を志望している学生が研究対象であった。つまり、基本的には子ども好きで子どもと接することが得意な学生が対象となっているのである。また、保育士養成校では、近年、自分の向き不向きを考えずに親の意志などから保育科に入学する学生もおり、実習時に大きな不安や挫折を感じる学生もいる。従って、子どもと大学生のコミュニケーションを考えていく場合に、子どもに特に関心を持っているわけではない学生やむしろ苦手意識を持っている学生についても研究対象としていく必要があると考えられる。はたして子ども好きで子どもと接することが得意な学生と子どもが嫌いでも苦手意識を持っている学生はどのように異なっているのだろうか。

このような観点から、筆者はこれまでに、教職課程が組まれていない短期大学の学生を対象に、つまり子どもとのコミュニケーションが苦手な学生も含んだ一連の研究を実施している(藤田、1999, 2000, 2002, 2004, 2005)。これらの研究では、まず、学生の子どもの観や子どもとのコミュニケーションに関する効力感を測定する。それにより学生を、肯定的子ども観を持ち効力感の高い群と否定的子ども観を持ち効力感の低い群に分類して、この二群について様々な比較を行いその違いを明らかにしようとしている。

藤田(2000)では、肯定的子ども観を持つ学生と否定的子ども観を持つ学生が、幼児の観察実習の中で子どもと実際に遊ぶ際、どのように子どもとコミュニケーションをとるのかを比較検討した。この調査では、実際の大学生と子どもとの会話を録音し、大学生の発話量と発話の種類(復唱・応答・質問・誘い・指導・賞賛)に焦点をあてて検討した。その結果、肯定的子ども観を持つ学生のコミュニケーションの特徴としては、子どもとの発話量が全体的に多く、「誘いかけ」「復唱」等の発話を多く行い応答性の高い会話を行っていることが示された。質問の種類は、子どもの自由な発言を可能にする「開かれた質問」が多く、子どもの会話を引き出していることが示された。一方、否定的子ども観を持つ学生のコミュニケーションの特徴としては、子どもとの発話量が少なく、質問の種類は、「はい」や「いいえ」で答えられる「閉ざされた質問」が多く、会話が展開しにくいことが示された。

また、藤田(2002)では、子どもと接することの効力感が高い学生と低い学生が幼児の観察実習の中で子どもと遊ぶ際、どのように子どもとコミュニケーションをとるのかを比較検討した。この研究では、子どもとの会話の中で大学生が話題を変えて話の流れが途切れた部分、子どもとの会話の流れを考慮しない大人としての発言、会話の文脈とは離れた唐突な質問など、子どもとの会話の流れに焦点をあてて検討した。その結果、効力感が高い学生は、会話の途切れや唐突な質問が少なく、子どもがその時に行っている遊びに関連したような質問をしたり、子どもの興味関心を満たすような話題を選択しているが、一方、効力感が低い学生は、その時の子どもの遊び内容には無関係な唐突な質問をしたり、会話の途切れが多いことが示された。

このように、従来の研究で、子ども観や子どもと接することへの効力感によってコミュニケーションのとり方に様々な違いがあることが明らかになった。こういったコミュニケーションスキルを身につければ子ども嫌いや苦手な人も子どもとうまくコミュニケーションがとれる可能性も高まるだろう。しかし、そもそも子どもの好き・嫌い、得意・苦

手は、どのような特性と関連しているのかということについてはほとんど明らかにされていない。そこで、本研究では子どもが好き嫌いという子ども観の違いはどのような特性と関連しているのかについて検討する。

現代の子どもが嫌いという人の特徴を調べるために、インターネットで「子ども嫌い」を検索すると、個人的なブログの書き込みがみられた。たとえば、「子どもが好きだったり犬が好きだったりするとすごお〜く『優しい人』って感じがする。だから世の中の子ども嫌い・犬嫌いな人はなるべくその事を隠して生活してるのだ。『冷たい人』『性格が悪そう』って感じるジャン？アタシはその1人である。犬より猫派。マックに入ると、子どもから遠い席を探す。」(<http://plaza.rakuten.co.jp/55scooby/diary/200605130000/>) というものや、「正直に言って、私は子ども好きではない。このことは、以前からコンプレックスの1つだった。同世代の友人たちのように、赤ちゃんを見ると『かわいい！』と寄って行って抱っこしたいと思わない。子どもや小学生は、接し方がわからないからなるべく避けている。そんな自分が、ひねくれて冷たい人間のように思え、子ども好きの人がうらやましかった。妊娠したら少しは変わるかと思いきや、全然。『虐待しそうで、子どもを産むのが怖い』と漏らす同僚の言葉に共感すら覚える。夜泣きやおむつ換えに嫌気がさして…と妙にリアルな想像をしてしまう。街で赤ちゃんに出会うと『うちの子もこんなふうになるかな』と目をキラキラさせる夫の横で、私は硬い表情のまま作り笑い。妊娠前ならまだしも、もうすぐ生まれるというのに…。」([http://www.kyoto-np.co.jp/ad\\_tokusyuu/ad\\_sanka/kochaka/050421.html](http://www.kyoto-np.co.jp/ad_tokusyuu/ad_sanka/kochaka/050421.html)) というものがみられた。

これらの書き込みから、子ども嫌いな人は、周囲の人から「子ども嫌いは冷たい人」、「性格が悪い」、「ひねくれている」、「母親失格」、「ひどい親」だと思われることを気にしていると考えられる。そのために、子ども嫌いであることを隠したり、相談できなかつたりする。本人自身も子ども嫌いな自分は「冷たい人」「性格が悪い」と思っており、子ども嫌いはコンプレックスのひとつと認識しているようである。このような冷たい人や暖かい人といった特性は、子ども観と関連しているのだろうか。

このような冷たさ・暖かさを測定するものとして、本研究では情動的共感性に注目した。共感性の定義には認知的理解の側面を強調するものと情動反応的側面を強調する定義とがある。冷たさ・暖かさという点を測定するためにはより情動反応的側面を強調した定義が必要だと考えられる。そこで、本研究では、情動反応的側面を重視したもので、Stotland (1969) によって定義された「他人が情動状態を経験しているか、または経験しようとしていると知覚したために、観察者にも生じた情動的な反応」をとりあげた。Mehrabian & Epstein(1972) は、Stotland の定義した共感を情動的共感と呼び、これを測定するための情動的共感性尺度を作成した。これを元にして日本人にふさわしい内容の尺度として新たに改定されたものが、加藤・高木 (1980) による情動的共感性尺度である。この尺度は、他者の情動や感情に対する共感性を測定するための尺度である。Mehrabian & Epstein(1972) では、この情動的共感得点の高い人は援助行動が多く、攻撃行動が少ないことが示されており、情動的共感性はその人の対人態度に影響すると考えられている。

従って、情動的共感性が子ども観とも関連している可能性は高いだろう。また、子どもは一般的に大人よりも感情が激しく表現されると考えられる。子どもと関わる際には子ども

もと一緒に遊びの楽しさや面白さを共感したり、一緒に様々な感情を味わったりすることが重要なのではないだろうか。この点から考えると子どもが好きな人は明るくはしゃいだりして相手の感情に共感しやすい特性を持っており、子どもが嫌いな人は感情に入り込まず冷静に関わるという特性を持っていると考えられる。つまり、子ども好きな人は情動的共感性が高く、嫌いな人は低いのではないかと予想される。

さらに、実際に子どもと関わる場面でも、肯定的子ども観をもつ人は、子どもとの感情的なかわりや子どもの感情に共感する体験、また遊びにおける高揚感をともなう情動的な体験が多いのではないかと考えられる。そこで、本研究では、肯定的子ども観を持つ学生と否定的子ども観を持つ学生に実際に子どもと遊んでもらい、その体験について記述してもらいその体験の情動的側面を比較する。

以上のことから本研究では、情動的共感性尺度を採用し、好き嫌いという子ども観によって情動的共感性また情動的体験に違いがみられるのかどうかを明らかにすることを目的とする。

## 【方 法】

### (1) 子ども観と情動的共感性に関する質問紙調査

調査対象者：本研究の調査対象者は、短期大学1年生92名の女性だった。

手続き：質問紙調査が講義時間中に集団で実施された。具体的な質問内容は以下のとおりだった。

- ①子ども観：子ども観を測定するため吉田・佐藤（1991）が作成した子ども観尺度を採用した。吉田らが作成した45項目のうち幼児にもあてはまると考えられる20項目を抜粋して実施した。採用した20項目は表1に示されている。子どもの特質を表す各項目について自分の考えにどの程度あてはまるかを5段階（大変思う～全く思わない）で評定してもらった。

- ②情動的共感性：情動的共感性を測定するために、加藤・高木（1980）の情動的共感性尺度25項目を採用した。この尺度は、3つの下位尺度から構成されていた。尺度Ⅰは「感情的暖かさ」10項目、尺度Ⅱは「感情的冷淡さ」10項目、尺度Ⅲは「感情的被影響性」5項目であった。採用した25項目は表2に示されている。各項目について自分の考えにどの程度あてはまるかを7段階（全くそうだと思う～全く違うと思う）で評定してもらった。

表1 子ども観質問項目

①想像力を持っている	⑪無限の可能性を持っている
②相手のことを思いやれる	⑫協力する気持ちが薄い
③自己中心的な行動をする	⑬ほかの人と同じ事をしたがる
④騒がしい	⑭自分の非を認めない
⑤生意気	⑮相手の話に耳を傾けよく聞く
⑥わがまま	⑯集団行動がとれない
⑦かわいい	⑰仲間はずれをする
⑧大人をよく見ている	⑱甘えが多い
⑨自己主張が強い	⑲友達づきあいがクール
⑩豊かな個性を持っている	⑳ライバル意識が強い

表2 情動的共感性尺度項目

感情的暖かさ	感情的冷淡さ	感情的非影響性
<p>小さい子どもはよく泣くが、かわいい。</p> <p>私は贈り物をした相手の人が喜ぶ様子を見るのが好きだ。</p> <p>私は映画を見るとき、つい熱中してしまう。</p> <p>私は大勢の中で一人ぼっちでいる人を見るとかわいそうになる。</p> <p>私は人が冷遇されているのを見ると、非常に腹が立つ。</p> <p>私は会計事務所に勤務するよりも、社会福祉の仕事をする方がよい。</p> <p>歌を歌ったり、聞いたりすると、私は楽しくなる。</p> <p>私は愛の歌や詩に深く感動しやすい</p> <p>私は身寄りのない老人を見ると、かわいそうになる。</p> <p>私は動物が苦しんでいるのを見ると、とてもかわいそうになる。</p>	<p>私は映画を見ていて、まわりの人の泣き声やすすりあげる声を聞くと、おかしくなることがある。</p> <p>私は友人が悩みごとを話し始めると、話をそらしたくなる。</p> <p>私は人がどうしてそんなに動揺することがあるのか理解できない。</p> <p>私は他人の涙を見ると、同情的になるよりも、いらだってくる。</p> <p>私はまわりが興奮していても、平静でいられる。</p> <p>私は不幸な人が同情を求めるのを見ると、いやな気分になる。</p> <p>私は他人が何かのことで笑っていても、それに興味をそそられない。</p> <p>私はまわりの人が悩んでいても平気でいられる。</p> <p>私は人がうれしくて泣くのを見ると、しらけた気持ちになる。</p> <p>人前もはばかりに愛情が表現されるのを見ると私は不愉快になる。</p>	<p>私は悪い知らせを人に告げに行くときには、心が動揺してしまう。</p> <p>私は他人の感情に左右されずに決断することができる。</p> <p>私は感情的にまわりの人からの影響をうけやすい。</p> <p>まわりの人が神経質になると、私も神経質になる。</p> <p>私は友人が動揺していても、自分まで動揺してしまうことはない。</p>

## (2) 情動的共感体験測定のための子どもの観察実習への参加

調査対象者：調査対象者は、短期大学1年生45名の女性だった。

手続き：(1)の質問紙調査の対象者のうち、約半数の学生に実際に子どもとのコミュニケーションを体験してもらうために子どもの観察実習に参加してもらった。子どもの観察実習とは、市内の幼稚園を訪問し、自由保育の時間(約1時間)に子どもと一緒に遊びながら行動を観察するという参加観察法の実習だった。大学生はランダムに選ばれた二人一組となり、観察対象となる子どもを一人決定し、一緒に遊びながら観察を行った。学生への教示は「子どもと一緒に遊ぶことで対象児の個性や特徴をつかむこと」だった。

観察実習後に「子どもとの遊びやコミュニケーションの中で楽しかったエピソード」と「子どもとの遊びやコミュニケーションの中で対応に困ったエピソード」を自由記述してもらった。

## 【結 果】

## (1) 子ども観による情動的共感性の違い

子ども観によって情動的共感性が異なっているかどうかを検討した。子ども観質問20項目の得点を算出した。平均点が62.6点だったので、平均点以上の人を肯定的子ども観群、平均点以下の人を否定的子ども観群として分類した。その結果、肯定的子ども観群は52名、否定的子ども観群は40名となった。

肯定的子ども観群と否定的子ども観群の情動的共感性得点をt検定を用いて比較した。

まず、情動的共感性 25 項目の合計点を比較した。その結果、有意差が見られた ( $t=2.55, df=90, p<.05$ )。つまり、肯定的子ども観群の方が否定的子ども観群よりも情動的共感性得点が全体的に有意に高いことが示された (図1 参照)。

次に、肯定的子ども観群と否定的子ども観群の情動的共感性得点を、下位尺度ごとに t 検定を用いて比較した。その結果、感情的暖かさ尺度で有意差が見られた ( $t=3.84, df=90, p<.01$ )。つまり、肯定的子ども観群の方が否定的子ども観群よりも感情的暖かさ得点が高いことが示された (図2 参照)。また、感情的冷淡さ尺度でも有意差が見られた ( $t=-2.13, df=90, p<.05$ )。つまり、否定的子ども観群の方が肯定的子ども観群よりも感情的冷淡さ得点が高いことが示された (図3 参照)。しかし、感情的被影響性尺度についての有意差は見られなかった (図4 参照)。

以上のことから、子ども観によって情動的共感性には違いが見られることが明らかになった。具体的には、肯定的子ども観群の人の方が全体的に情動的共感性が高く、特に感情的暖かさが高いことから、あたかも人の情動を自分自身のもののように感じ取る能力が高いことを表している。そして、否定的子ども観群の人の方が全体的情動的共感性と感情的暖かさが低く、感情的冷淡さが高いことから、人の情動を自分自身のもののように感じ取る程度が低いことが示された。

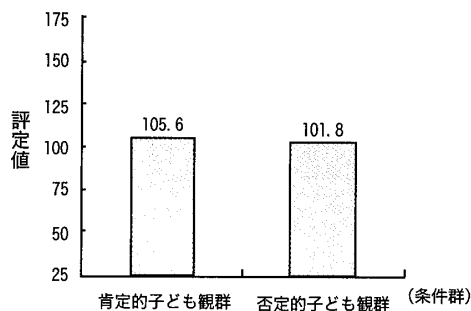


図1 情動的共感性総合得点

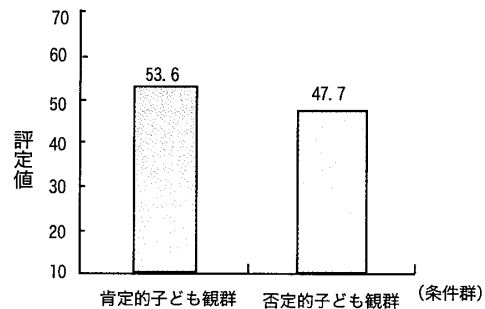


図2 感情的暖かさ尺度

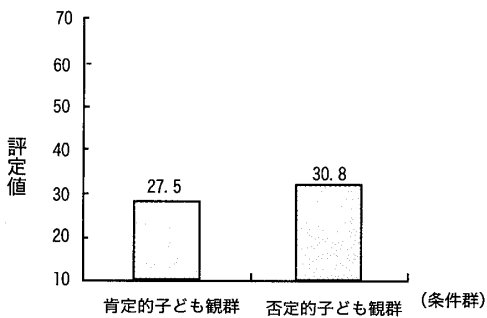


図3 感情的冷淡さ尺度

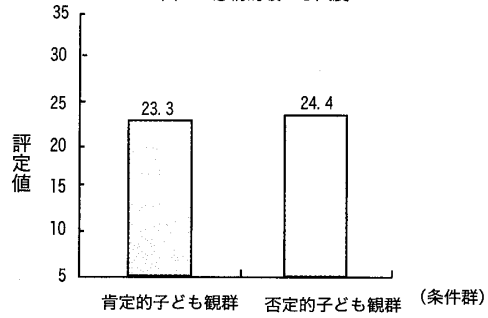


図4 感情的被影響性尺度

## (2) 子ども観による情動的共感体験の違い

子ども観によって、実際に子どもと関わった場合の情動的共感体験に違いが見られるかどうかを検討した。子どもの観察実習に参加した学生が実習後に記述した「子どもとの遊びやコミュニケーションの中で楽しかったエピソード」と、「子どもとの遊びやコミュニケーションの中で対応に困ったエピソード」を分析し、比較した。

学生の記述した各エピソードを内容により分類した。複数回答もあり、それについては

それぞれを一つずつの記述数として算出した。45名の対象者のうち26名が肯定的子ども観群、19名が否定的子ども観群だった。記述の出現割合は、各群の全体人数における割合である。楽しかったエピソードの分類と子ども観群による記述数の違いを表3に示した。表3より、楽しかったエピソードの記述数は、否定的子ども観群よりも肯定的子ども観群の方が多いことが示された。内容別に見ると、「スキンシップ」や「子どもに戻って楽しんだ」や「できないことができるようになったときの笑顔」という記述は肯定的子ども観群の方が多かった。逆に「一緒に遊んだ」という記述は、肯定的子ども観群より否定的子ども観群の方が多かった。また否定的子ども観群ではその他として「子どもの言うことがかわいかった」「なついてくれた」という記述が見られた。つまり肯定的子ども観群は、楽しいうれしいなどの感情的記述が見られるが、否定的子ども観群ではただ遊んだという事実のみの記述で感情的記述は少なかった。

困ったエピソードの分類と子ども観群による記述数の違いを表4に示した。表4より、困ったエピソードの記述数は、肯定的子ども観群と否定的子ども観群では大きな違いは見られないことが示された。内容別に見ると、「子どもが理解できない」「子どもから嫌なことを言われた・された」という記述は肯定的子ども観群より否定的子ども観群の方が多かった。逆に「自分が対応できない」という記述は否定的子ども観群より肯定的子ども観群の方が多かった。つまり、肯定的子ども観群の記述は、子どもとのコミュニケーションで困るのは自分に責任があるような表現だが、否定的子ども観群の記述は、自分に責任はないというような表現であった。

表3 楽しかったエピソードの記述数（カッコ内は%）

	肯定群	否定群
一緒に遊んだ	8 (30.8)	17 (89.5)
スキンシップ	7 (26.9)	0
子どもに戻って楽しんだ	5 (19.2)	0
できないことができた時の笑顔	4 (15.3)	0
その他	5 (19.2)	2 (10.5)

表4 困ったエピソードの記述数（カッコ内は%）

	肯定群	否定群
子どもが理解できない	7 (26.9)	9 (47.4)
子どもから嫌な事をされた	3 (11.5)	4 (21.1)
自分が対応できない	5 (19.2)	1 ( 5.3)
体力が持たない	2 ( 7.7)	2 (10.5)

### 【考 察】

本研究は、子ども観によって情動的共感性や情動的共感体験に違いがみられるのかどうかを明らかにすることを目的とした。まず、情動的共感性尺度を採用し、子ども観によって情動的共感性が異なっているかどうかを分析した。その結果、肯定的子ども観群は否定的子ども観群に比べて、感情的暖かさ尺度が高く、冷淡さ尺度は低いことが示された。こ

のことから、子ども観によって情動的共感性に違いが見られることが明らかになった。

次に、子ども観によって、実際に子どもと関わった場合の情動的共感体験に違いが見られるかどうかを検討した。幼児の観察実習に参加した学生が実習後に記述した「子どもとの遊びやコミュニケーションの中で楽しかったエピソード」と、「子どもとの遊びやコミュニケーションの中で対応に困ったエピソード」を分類し、比較した。

その結果、肯定的子ども観群は楽しかったエピソードが多く、それに対して、否定的子ども観群は楽しかったエピソードが少なかった。また、肯定的子ども観群は、楽しい、うれしいなどの感情的記述が見られるが、否定的子ども観群ではただ遊んだという事実のみの記述で感情的記述は少なかった。また、記述数は少ないものの、肯定的子ども観群の「子どもができないことができるようになったときの笑顔」と否定的子ども観群の「子どもの言うことがかわいかった」という記述は対照的だった。「できないことができるようになったときの笑顔」というのは、子どもが感じたできたという喜びに学生が共感した内容である。一方、「子どもがかわいかった」という記述は、肯定的な表現であり子どもを嫌っているということではないが、しかし、これは学生の方が感じたことであり、子どもの感情ではない。どちらかという自分と自分が大人で相手が子どもという対等でない立場からの記述であり、外見的な表現でもあるといえよう。従って、否定的子ども観群の学生は、子どもに近づいて子どもの内面的感情に共感しようとはしていないのではないかと考えられる。

困ったエピソードについては、記述量に違いは見られなかったが、肯定的子ども観群の記述は、子どもとのコミュニケーションで困るのは自分に責任があるような表現だが、否定的子ども観群の記述は、自分に責任はないというような表現であった。これらのことから、子ども観によって情動的共感体験にも違いが見られることが示された。

それでは、なぜ肯定的子ども観群は、情動的共感性が特に感情的暖かさの点で高かったのだろうか。加藤・高木(1980)によると、「感情的暖かさ」は、自己概念の「明朗性・友好性」と「情緒性」と関連を持つことが示されている。子どもとのコミュニケーションは基本的に遊びを通してのものが考えられる。遊びのイメージは、楽しさ、活発さなどの明朗性や友好性と関連するようなものではないだろうか。従って、肯定的子ども観を持つ人は、明朗性や友好性と関連するような感情的暖かさという特性が高いために、遊びを中心とする活発な子どもの特性に共感しやすく子どもを肯定的にとらえているのではないかと考えられる。また、同様に「感情的暖かさ」は「独立性」とは正の相関を示し、「反抗・内的混乱」とは負の相関を示すことが明らかにされている。つまり、感情的暖かさが高いということは、独立意識が高く、精神的に安定し混乱のないことである。このことから、肯定的子ども観を持つ人は、精神的な安定が高いといえる。

否定的子ども観を持つ人は、その群だけでみた場合は感情的暖かさよりも感情的冷淡さの得点の方が高かったわけではない。あくまで、肯定的子ども観を持つ人と比較した場合に感情的暖かさ得点が低く、感情的冷淡さ得点が高かっただけである。したがって、否定的子ども観を持つ人がイコール冷たい人だと直接的に言うことはできない。しかし、比較するとやはり感情的暖かさが低いこともまた確かである。やはり明朗性や友好性が低いと、子どもの持つ遊び中心の活発な行動特性を肯定的にとらえることが難しいのではないかと考えられる。また、感情的暖かさが低いことは、独立意識が低く精神的な不安定さと関連



している。したがって、否定的子ども観を持つ人は、依存的で精神的にも不安定な面を持っていると考えられる。

以上のことから、感情的暖かさという情動的な共感性は、子ども観の形成に重要な役割を果たしていることが示唆された。従来の子どもと大人の世代間コミュニケーションの研究では、コミュニケーションのスキルを中心に検討されてきた（菊池・堀毛, 1994; 長田, 1994; 富田・田上, 1999）。確かに、子どもと関わるのに適したスキルがあり、それを獲得していることが重要である。また、子どもの行動をどう理解していくかという認知的な側面も重要であろう。しかし、子どもとのかかわりの契機に関連するような子ども観の形成において、より情動的な共感性の側面に目を向ける必要があると考えられる。暖かさ、明朗性、友好性、活発さ、楽しさ、うれしさといった部分に共感できる特性を備えておくことが子どもと関わるためには重要であると考えられる。

また、興味深いのは、感情的暖かさは独立意識と関連しており、肯定的子ども観を持つ人が必ずしも子どもに近いような幼い自己意識を持っているわけではないということである。むしろ否定的子ども観を持つ人の方が、依存的な幼い自己意識を持ち精神的に不安定である可能性がある。また共感性が低いという対人的に未熟な側面を持っているといえるのである。つまり、子どもという理解しにくい面や扱いにくい面がある存在を肯定的にとらえることができるということは、その人自身が独立した自己意識を持ち、精神的に安定している大人であることが必要だということが示唆された。

しかし、本研究では、子ども観と独立意識や精神的安定性の関連を直接検討したわけではないので、今後直接的にこれらの関連を検討する必要があるだろう。また、否定的子ども観を持つ人が特性的に子ども嫌いであると決めつけてしまうことは適切でないと考えられる。否定的子ども観を持つ人が共感性の未熟な点を発達させる可能性がある点や、また、冷静に子どもをとらえることができる、子どもの感情に巻き込まれないといった子どもとかわるために必要な異なる特性を持っている可能性がある点に関して、今後検討していく必要があるだろう。

#### 【引用文献】

- 藤田 文 1999 「幼児の観察実習」が女子短大生の子ども観におよぼす影響 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 37, 79 - 86.
- 藤田 文 2000 「幼児の観察実習」における短大生と幼児のコミュニケーション 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 38, 109 - 118.
- 藤田 文 2002 幼児と短大生の世代間コミュニケーション (V) —コミュニケーションの連続性— 九州心理学会第63回大会発表論文集, 36.
- 藤田 文 2004 子どもとのコミュニケーションに対する自信と子どもと接した経験との関連 日本発達心理学会第15回大会発表論文集, 380.
- 藤田 文 2005 子どもと大学生のコミュニケーション—コミュニケーションスキルに関する認識の変化を中心に— 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 42, 117 - 130.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, 2, 33 - 42.

- 菊池章夫・堀毛一也 1994 社会的スキルの心理学 川島書店, 124-137.
- 吉良 俣・佐藤静一・篠原弘章 1974 教育実習体験に関する研究—教師観及び教職意識の変化— 熊本大学教育学部紀要 (人文学科), 23, 166-182.
- Mehrabian, A., & Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40, 525-543.
- 三木知子・桜井茂男 1998 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究, 46, 203-211.
- 長田久雄 1994 年上年下とつきあうスキル 社会的スキルの心理学 菊池章夫・堀毛一也 編 川島書店, 124-137.
- 大野木裕明・宮川充司 1996 教育実習不安の構造と変化 教育心理学研究, 44, 454-462.
- Stotland, E. 1969 Exploratory investigations of empathy. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 4. New York: Academic Press. 271-314.
- 富田久枝・田上不二夫 1999 幼稚園教員の援助スキル変容に及ぼすビデオ自己評価の効果 教育心理学研究, 47, 1, 97-106.
- 吉田道雄・佐藤静一 1991 教育実習生の児童に対する認知の変化—実習前, 実習中, 実習後の「子ども観」の変化— 日本教育工学雑誌, 15, 93-99.

#### 【付 記】

データの分析にあたりましては、衛藤彩香さんと西口美穂さん（大分県立芸術文化短期大学 2006 年度卒業）にご協力をいただきました。記して感謝いたします。

本研究のデータの一部は、2007 年第 60 回日本保育学会において発表された。